

人間的な評価では**大きな都**。私もエルサレムには何十回も行きましたが、エルサレムはコンパクトシティで、世界の超大国・大国の首都と比べたらかなり小さいです。北京なんかとは比べものにならないくらいスケールが小さい首都ですが、ここでは**大きな都**。

これは、サイズが大きいというよりも重要度が大きい。ある意味で“大いなる”と訳したほうが良いと思うんですね。ユダヤ人にとって、この上もなく重要な意味を持つ都になっているという意味です。

なぜそんなに重要な、尊厳を持つ都と評価されているのか。神殿があったんです。

旧約聖書時代、エルサレムに神殿があった。あの神殿礼拝、神殿でいけにえが献げられていたことが、艱難時代に再現されているんですね。ユダヤ教の世界では、この上もなく誇らしい町であるに違いないです。

しかし同時に、**霊的な理解ではソドムやエジプト**。

霊的な理解は、他の翻訳の聖書では**御霊による認識**においてはとなくなっていました。

つまり“神の観点で見ると”と捉えたらいいでしょう。

人から見ると大いなる都。でも、神の観点で見るとソドムやエジプト。

エルサレムをソドムやエジプトになぞらえて語った預言者が旧約聖書に登場します。エゼキエルです。

エゼキエル書 16 章で、エルサレムはソドムよりもっと酷い町だと書いてあります。

エゼキエル書 23 章では、エルサレムはエジプトのように酷い町なんだと言っているんですね。

ソドムやエジプトの何が酷いのか。忌まわしいことを行っている町・国だと言うんですね。

旧約聖書で“忌まわしいこと”とは偶像礼拝を指す言葉です。基本的に偶像礼拝を表します。

人間の手で造った像を拝む行為が偶像礼拝。エルサレムが偶像礼拝の町になり果ててしまったことを責めているんです。

神様の観点では、神殿礼拝は偶像礼拝そのもの。メシアであるイエスを除外した上での神殿礼拝は、意味がないだけでなく偶像礼拝。神殿を拝む礼拝になっている。

更に言うならば、艱難時代の後半 3 年半、エルサレム神殿は 1 人の人物を礼拝するための施設になってしまうんです。その人物が反キリストなんですね。

ですからエルサレムは、**霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる**んですね。

9 もろもろの民族、部族、言語、国民（くにたみ）に属する人々が、三日半の間、彼らの死体を眺めていて、その死体を墓に葬ることを許さない。

2 人の預言者は死体になって晒しものにされます。



10 年ほど昔、『アルゴ』というアメリカ映画を見ました。

確か、その年のアカデミー賞を取ったんじゃないかと思えますけど。

実際にあった出来事を基にした映画です。

1970 年にイラン革命がありました。

パーレビ国王が追放され、イスラム教シーア派の大アヤトラであるホメイニ師が亡命先から戻って来て、イスラム原理主義の国に一変するんですね。

亡命したパーレビ国王をアメリカが受け入れたのですが、それに腹を立てたイスラム主義に熱狂する学生たち、主に若者たちが抗議の意を示そうと。

それが暴走行為になり、アメリカ大使館の壁をよじ登って、あっという間に占拠してしまったんです。

アメリカ大使館の中にいた 50 数名の大使館員たちは、それから 444 日間にわたって人質になってしまいました。どこの国にある大使館も、その敷地内はその国の主権が及ぶ範囲とみなされています。主権侵犯もいいところですよ、この時のイランの学生たちがやったことは。

ところで、アメリカ大使館から逃げてカナダ大使館に身を隠した大使館員が 6 人いたんです。アメリカ人です。大使館の中にいる人たちを救出することはできない。しかし、カナダ大使館に身を潜めているこの 6 人を奪還するために、CIA が極秘の計画を練って実行する。

それを映画化したものなんですね。色んなエピソード満載で、ご覧になることをお勧めします。

その冒頭、イラン革命で何が起きているのか、実際のニュース映像・ドキュメントフィルムを入れているのですが、驚きのシーンの 1 つに、親米派のイラン人だとみなされた人たちが吊るされている場面があるんです。高層建築物を建てるためのクレーン車、そのクレーンのアームを思い切り伸ばすと 30m・40m・50m くらい。その先端に、首に縄を掛けられて死体となっている親米派/裏切り者とみなされたイラン人の男性が吊るされている。恐ろしいですねえ。

なぜそんなことをしたのか。1 つは見せしめ。アメリカに通じたらこんな目に遭うぞ。

そして、この体制に逆らう者には断固たる処置を取るぞ、という強い意思の表明でもあるんです。

2 人の預言者は「イエス・キリストこそイスラエルの救い主である」と証言したのですが、そのようなことはもう絶対に言うな。信じるな。それは許されないことだ、ということを見せしめるために 3 日半の間吊るした。

そして、**もろもろの民族、部族、言語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体を眺めている。**

世界中の人々が 3 日半の間、リアルタイムで、この吊るされている死体を中継で見ている。

黙示録が書かれたのは 1 世紀の終わりです。その時はスマホも無ければ衛星中継も無い。

だから、ここに書かれてあることは、当時の人々には荒唐無稽のことに感じられたでしょう。

しかし私たちは、「これは今の時代のテクノロジーだ！」と気づくんじゃないですか？

私たちは黙示録が語っている世の終わり/終末時代に近づいている。非常に近い時代に今生かされていることをここからも知ることができるし、聖書預言の正確さを見て取ることができるのではないのでしょうか。

10 地に住む者たちは、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を交わす。

この二人の預言者たちが、地に住む者たちを苦しめたからである。

黙示録、特に艱難時代の 7 年間は、もう酷い 残酷な 恐るべき記事がずらっとビッシリ続くのですが、唯一お祝いしている日があるんですね。それがこの日なんです。

2 人の預言者が殉教死した。おそらく世界中共通の祝日に定められるんでしょう。

あらゆる公的なサービスが中止。みんなでお祝いする日。「2人の預言者が死んだ！バンザーイ！」と喜ぶ日。それくらい2人の預言者の活躍は、世界に大きなインパクトを与えていたんです。

11 **しかし、三日半の後、いのちの息が神から出て二人のうちに入り、彼らは自分たちの足で立った。見ていた者たちは大きな恐怖に襲われた。**

なぜ大きな恐怖に襲われたんですか？ 今まで天下無双の2人を誰も倒すことができなかった。その2人を倒した反キリストはなんて凄いんだ！とお祝いを言い合ってたんですよ。しかし、反キリストが倒したはずのこの2人が復活した。反キリスト以上に強い力はないと思われたのに、殺されたはずの2人が神の力によってよみがえった。それによって、反キリストの力が全く及ばない、圧倒的主権者の力が示されたんです。神の力は完全。完璧。最強。そんな力があるのだということ、ここで見せられたわけですね。

12 **二人は、天から大きな声が「ここに上（のぼ）れ」と言うのを聞いた。**

「ここに上れ」と誰が言ったんでしょう？ おそらくイエス・キリストです。というのは、8節 彼らの主も十字架にかけられた。2人の預言者の主はイエス・キリスト。主は彼らに「あなたがたは使命を達成しました。さあ、ここに上りなさい。」

12 **そして、彼らは雲に包まれて天に上った。彼らの敵たちはそれを見た。**

彼らの敵たちは目の前で、2人のよみがえりだけではなく、天に帰って行く姿を見た。

13 **そのとき、大きな地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のために七千人が死んだ。残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰した。**

恐れたというのは2種類あると思うんですよ。

反キリストに協力する者たちは、2人の復活と天に挙げられる姿を見て恐れた。

なぜなら、2人の預言者のメッセージは“イエス・キリストは十字架に掛けられて死んだだけではなく、3日目に復活した”という復活メッセージだったからです。

「そんな、死んだ人間がよみがえるって、あり得るかあ！」と思ってたら、自分たちの目の前でそれが起こった。彼らが言っていたのは本当だった。

そして、彼らが語っていたもう一つのメッセージ、すなわち「今は患難時代である。艱難時代の前にクリスチャンたちは天に挙げられた。」この大事件について、「そんなものは集団自殺でもしたんじゃないか」というような不信仰な解釈がまかり通っていたでしょうが、そうじゃない。

2人が天に挙げられて行く姿を見た時「携拳は本当にあった。」

今日の前で、生きながら天に挙げられて行く2人の姿を見て、「この2人の預言者が言っていたこと—復活と携拳—は、文字通り本当のことだった。」それを知った時に戦慄したんですね。

恐れる者たちの中には、2人の預言者の言葉に聞き入る人たちも残されていました。

それが、**天の神に栄光を帰した**という言葉です。これを境に、それまでは2人の預言者の言葉に真剣に耳を傾けていなかった人たちまでもが本当のことだと気づいて、彼らの言葉に従うようになります。具体的には「反キリストはヤバイぞ。彼は悪魔の人格を持った独裁者になる。」

そして、2人が紹介したイエス・キリストの言葉に従って、一刻も早くエルサレムから山に逃げます。
どこの山ですか？ ヨルダンにあります。
これからのことについては、また続きをお話したいと思います。

最後に **7 節**を読んで終わらしましょう。

二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。

ここだけ読むと、「反キリストのほうが2人の預言者よりも強い。だから、2人の預言者は敗北して死んでしまった」と思いやすいのですが、そうではありません。

なぜ2人の預言者は殺されてしまったのでしょうか。二人が証言を終えたからです。
2人の人生の使命は、エルサレムで3年半の間、御国の福音を伝えるということでした。
その証言を・与えられた使命を成し遂げたので、神様が「あなたがたが地上でなすべき使命はここで終わった。お疲れさまでした」と、地上の生涯を閉じることを許されたのです。

反キリストが強いので敗北して殺されたんじゃない。
使命が終わったので、自分の魂の休み場であり故郷（ふるさと）である神の御元に帰ったんですね。

これは全てのクリスチャンたちに言えることです。
全てのクリスチャンは一人ひとり、神様からの使命を与えられています。
その使命を成し終えるまでは死にません。使命が、御心が、一人ひとりの人生を守っています。
ですからクリスチャンは、神様のタイミングで一番良い時に召されるという安心感があるんですね。

どんな死に方なのか、それは分かりません。しかし神は、一人ひとりに使命を準備しておられ、その使命を十分に果たし終えたなら、「お疲れさま。ごくろうさまでした」と言って、私たちが天に引き挙げてくださると聖書は語っています。

神の御心によって引き寄せられ、御心によって信仰を与えられ、御心を生き、御心のタイミングで天に凱旋する。ステキな生涯だと思いませんか？

もしまだイエス・キリストを信じていない方がおられたら、ぜひ信じてください。
そして、素晴らしい人生の中にお入りください。心からお勧めします。

よろしければ、チャンネル登録をお願いします。
まだまだ続きますので、お付き合い頂いたら嬉しいです。
ではまた このチャンネルでお目にかかりましょう。さよなら！

☆使用した聖書は「聖書 新改訳 2017」です。